

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 24 回

福岡表警聞懐旧談 (一六)

越知彦四郎の命で、捕虜となつていた官軍曹長は秋月城内で処刑された。越知はそのことを、早まったと反省する。官軍はひたひたと秋月城にこもる福岡士族へと迫っていた。やがて火ぶたが切られる。劣勢に追い込まれた越知彦四郎はついに全軍解散を命じ、負傷者・脱落者を除き、豊後での薩軍との合流を目指し、秋月城裏の山道をたどることになるのである。

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談 下

清漣野生編述

第十二回 (続き)

但し、跡にて聞く所によれば、彼巡查の七名は事平で后、悉く懲役十年に処せられたり。又彼の曹長へは我兵に擒せられ、秋月の陣営に召連られて、哀れ憐殺せられたりき。

聞所によれば、彼曹長は岡山県士族にてありしやう

意を以て、此の守袋を形見として僕が郷里に贈り下されよとの一語の外、その他は言はざりける。

折から越知大隊長に随伴して戦線を斥候す。其事を果して陣所に帰り見れば、哀れ件の曹長は兵士連に惨殺せられし跡でありたり

で、同行の護衛兵は小倉士族より新募せられしものなりしかば、我兵を迎へて叩頭降伏せしも、彼曹長は即ち然らず。毫も屈せず、抗言して已まざりしも、其場の勢、万已むを得ず、遂に我兵に生擒せられ、秋月の陣営に召連られたり。

然れ共、我兵の内にも有志連へは其同情を表して其場を脱去せしめんことを謀る。その有志の一人中野震太郎は、窃かに彼曹長を木陰に誘ひて耳語し、夜深に乗じ、此場を脱出す可しと勧告したさうだが、彼曹長答らく。

僕は官兵であり、不幸にして進退嘔□、遁するに路なくべし。去りながら、足下の好意は感謝するに余ありとて、その懐中より肌の守袋を取り出して中野に授け、謂らく。

僕は岡山県の産れであり、家に一人の老母を遺せり。僕の末期に際し、心にかゝるは母が身の上なれば、足下僕の心を察し、好

嘯して彼を殺さしめたるこそ遺憾でありた。ヨシヨシ事平ゐで、彼が形見は予より彼が郷里に贈りて以て懺悔すべしと叫んで、彼の守袋は越知その人が自ら懐中しつゝ、ありたり。

その末路の失敗、遂にその俛となり、僅か岡山県人なりとのこと丈は胸裡に記憶し、その姓名が何と云たりし、歿して仕舞こと、中野今日、編者に向ひて打語れり。嗟呼嗟呼兵馬□惚、玉石混合して、斯る勇壮任侠の官兵が姓名迄も歿去せしは、惜むべきの甚しきものにあらずして、何矣や。

予は少しも彼が情実を知らんから、実は養時に陣を発するに臨み、兵士に

呼咽呼咽。それより全隊は、徐々として阿弥陀峯の人家より東に入り、乙隈□男女石の村落に出て、以て秋月の市街に入りしに、同地の士族惣代よりして、某々等は出向いて懇勸に款接して説らく。

実は貴軍に應じて声援すべき処でありしも、承知の如く、客年十二月当地騷擾の余向は、有志者は悉く各地に繋囚せられ、内に残りしは老人と子供斗りなりとて、内密に糧餉の世話なをし、犒物を致して、以て旧城内へ案内休憩せしむる杯、以て従来交誼・信義を欠かざりしなり。是れ即ち四月一日暮つ方なりけり。

越知の一累、隊士の一列、閑々糧餉を遣ひ、一杯を酌んで連日連夜の疲労を爰に療し、各自銃を枕とし

て一睡に入らんとせし猶予もあらず。彼の馬市に於ての敗兵、某々等の二、三名は罫を脱して命辛々馳せ附て、一軍全滅の凶報を齎し告ると同時に、俄に数隊の官兵は秋月城を圍繞して、八方より攻撃しか、りたり。

越知は衆を令して決死の防戦を命ず。士衆爰を先途として攻戦ひ、その夜を徹す。

翌二日東天紅を呈せんとするの頃には、兵は疲れ糧は欠き、又戦闘力を有せざるに及ぶ。此時無数の官兵は、前後より疾風の如く攻寄りて乱発す。味方は死物狂となりて、最後の決闘を試み、詰り各自銃器を抛棄し、抜刀・呐喊数回に渉る。見る間に多数の死傷を起す。

即ち大野貞四郎・松井四郎を始め、五、六名は敵軍を射殺す。然れ共、士衆は尚ほも従ひて一死を共にせんことを乞ふも、越知は痛く制して謂らく。諸君は是より官兵に降りて、一時の艱苦を忍び、運を天に任せ、所謂人間に七生して我々が宿慮の存せし処を後継あるべし。我々も是より一死を決して、豊後路指して落延び、薩軍に投じ、その応援の宿願を徹すべしと。



秋月城の名残を止める「黒門」。かつては秋月城の大手門だったが明治13年、垂裕(すいよう)神社の門として城跡の一角の現在地に移されている



城下は、福岡県の小京都として一年中、観光客でにぎわう

其他、負傷者もありしが、同志打寄り、肩にかけ、或は扶持して、旧城内の本部へ向け連れ帰りて、療治を施せしことも知らるべし。於是越知は旧城の裏手なる森林へ余燼の士衆を打纏め、冷酒を酌んで訣別し、今は是迄なりとて、隊士の積日の勞を謝し、全隊に自由解散を命ず。

然れ共、士衆は尚ほも従ひて一死を共にせんことを乞ふも、越知は痛く制して謂らく。諸君は是より官兵に降りて、一時の艱苦を忍び、運を天に任せ、所謂人間に七生して我々が宿慮の存せし処を後継あるべし。我々も是より一死を決して、豊後路指して落延び、薩軍に投じ、その応援の宿願を徹すべしと。

越知は声高々に何か詩律を吟詠なして訣別す。是れ四月二日夜半のことなりけり。